



ものすごい、猛暑

毎日熱中症警戒アラートが鳴る日々。外遊びを仕事とする人間にとっては死活問題な気候です。先日はプレーパークスタッフとして出動。久しぶりに炎天下の中、1日中外にいました。子どもたちは猛暑でもお構いなし。水遊び、生き物探し、木登りと大忙しです。お昼ご飯前に少年が小川から小魚を獲ってきて、その小魚を手握ったままウロウロ。

「お魚弱っていくんとちゃうん〜?!」と声をかけると「焼くねんこれ!」と堂々と宣言されました!「え!マジで?!」と思って観察を続けましたがマジでした。少年がウロウロしていたのはなんと焼き場となる鉄板探しのため。アスファルトの上に置いてみたり、マンホールの上に置いてみたり、朽ちた鉄の看板の上に置いてみたり…「嗚呼、かわいそうなお魚…」と思いつつも、『絶対この魚を焼いてみたい!』という強い思いが伝わる眼差しを見ると、止めることはできませんでした。

プレーパーク及び冒険遊び場のモットーは第1回投稿で取り扱った森のようちえんと似ています。森のようちえんとは違いプレイパークの参加年齢に上限は無し。子どもがすることに大人は手出し、口出しはしません。自由な遊びと失敗する権利を守るための合言葉は「ケガと弁当は自分持ち。」子どもたちのちょっと危ないことも、変なことも、汚いことも大人はとことん見守ります。

次第にだんだんと手の中で魚が弱っていくのを感じたのか、そこそこで踏み切りをつけた少年。倉庫の前にある分厚めのマンホールを鉄板代わりにすることになりました。うんうん、大人がわざわざ「お魚がかわいそうだよ!」「命を大切に!」とヤイヤイ言わなくても、小さな手のひらの中で命がどうなっていくのを感じるこって大切なかもしれない。小魚を握りながら歩く少年に「お魚が弱っていくよ。」「かわいそうだよ」と思い声をかけてしまうのは野暮だった…きっと彼はそんなことを分かった上で次の活動について考えていたはず…と大人の考えで言葉がでてしまった自分に少し反省です。

「せっかく焼くなら美味しく食べたい!」と感じた少年たちは大人の人差し指ほどの小魚をアルミホイルに包み、塩をかけそれなりに調理。少しでも早く火が通るように!と上から朽ちた鉄板を乗せてサンドイッチしました。「遊んでくるからたびちゃん、魚見といてー!」と水遊びに戻って行った少年たちでしたが、自分たちがやりたいと思って実行したこと、気になるのか分刻みに様子を見にくるんです(笑)肝心の魚はというと、だんだん目が白く、体が生暖かくなって、匂いはほぼ焼き魚…!『焼けるような日差し』という言葉が比喩ではなくなってきている…!と感じた出来事でした。(※マンホールクッキングでは生焼けだ!ということで安全のためにフライパンで再度焼いてから食べたとの

ことです。) 猛暑日には猛暑日にしかできない刺激的な遊びがあることを子どもたちに教えてもらった出来事でした。

その季節だから、できること

小学生が対象となると本人たちの工夫次第でそれなりに夏の遊びを楽しむことができるのですが、乳幼児を相手とするとそうはいかないのが現実。(小学生以上でも危険な暑さが故になんでも子どもの好きなように！とはいかないのですが…) 園に勤務していた4～5年前は今よりも3度くらいは気温が低かったはず。それでも、毎朝30分ほど前倒しで出勤してプールの準備。熱中症計が警戒レベルを示したら「今日は、お外に出られません…」と子どもに伝える心苦しさ…本当に暑さに振り回される日々でした。それでも当時は、なんとか曇りのタイミングを狙う、雨模様の日こそ外に出ちゃおう！と機転を効かせるなどして、夏の自然と触れ合う体験をなんとか提供しよう！と必死だったように思います。

しかし、大人が環境を構成して保育を計画する現場から離れて数年、自然がフィールドとなるとここまでの準備は必要ではなかったのかもしれない…と気づき始めました。6月後半、じめつした気温の中でお散歩会がありました。「お散歩会」とは、主に0～2歳児の子どもとその保護者を対象とした戸外遊びの会。森のようちえんのプレ段階として位置づけられることもあります。0歳児さんの親子が参加する場合は、抱っこで参加の子も多いです。抱かれています子どもも、抱っこしているお母さんもじわっと、もわっと気持ちの悪い暑さからは逃げられません。この日でもできるだけ涼しく活動できるようにと森林の中で過ごしたり、小川で生き物探しをしたりしました。

「おはよ～」とみんなが集合してからは日当たりのいい広場で自然散策をしていました。子どもたちと遊ぶ中でこれはすごいな…と毎回感じることは好きなことへの集中力と絶妙なタイミングでの活動に切り替え。遊び

が始まった瞬間から少しでも日陰を求めてしまう大人とは違い、まずはお目当ての生き物を探すぞ！と日差しの下で遊ぶ子どもたち。大人が「そろそろ、お茶飲もうか。」「影のところおいでよ。」と促すことで休憩ができる子もいるのですが、見守りや観察を主とする自然保育活動に携わるようになってからは、意外とそんな声掛けなしでも子ども自らが調節しているのでは…と気づきました。子どもたちは遊びながらどのあたりの水が冷たいか、日陰はどこか感じ取ることができている様子。遊びはじめは「見つけたい！」という欲を軸にバラバラの場所で遊んでいた子どもたち。暑くなってくると上流や木陰に集まり、体が冷えてくると水のぬるい下流や日向に歩いていきます。乳児さんは発達段階的にも「平行遊び」ができるか、できないかというところ。お互いの遊びを見て移動している子もいるとは思いますが、どちらかという生き物としての勘を使い、「心地よく遊べる場」に集まっているように見えるのです。

小川や木陰など心地よく過ごすことのできる場所を有効活用しながら遊ぶ夏の戸外遊び。大人はスズメバチなど危険な虫がいないか、ヘビが出てくるリスクのある草むらがいないか事前にフィールドチェックをする以外に特に環境作りはしていません。子どもたちの感じる力を大切に「心地いい」と感じる場でたっぷり遊び、「ここは違う」と感じる場所からは移動する。この遊び方、一見子どもに振り回されているようにも感じますが、子どもが「いい！」とを感じる環境って自然と大人にも好感触。まっすぐ高く伸びた木々が作る木陰、しっとり、ひんやりとしたおがくずの地面、足を浸すだけで額の汗が引く山水の流れる小川…保護者の方も「気持ちいい…」

「外なのにしんどくない！」とほっとしている姿を見ると、大人が用意し提供する環境なんて、雄大な自然環境と比べたら足元にも及ばないことを痛感します。

「ここがいい。」「また来たい。」と心から感じる環境も森が繋いでくれる出会いのひとつなのかもしれません。